雄略天皇像の再考

――『古事記』の植物を手がかりとして――

田中千晶

雄略天皇は〝怒る天皇〟というイメージをもつ。『日本書紀』（以下『紀』とする）においては怒りのあまりに人を殺す話が何度もあらわれ、「大悪天皇」「悪行之王」と記される。『古事記』（以下『記』とする）においてもまた、次々と人を殺す姿が描かれている。この残虐さが雄略のイメージのひとつとして定着していることは、異論のないところであろう。反面、同じ『紀』のなかで「有徳」とも記され、『記』は猪から逃げる姿を描き、さらに『万葉集』は冒頭に雄略御製とするのびやかな歌を掲げている。多面性が雄略の特色ともいえよう。

本論では、『記』にあらわれた植物を手がかりとして、従来の「大悪」「有徳」イメージとはまた異なる、雄略天皇が持つ別の一面の可能性を探る。さらに、天皇と植物あるいは自然との関係についても言及したい。

一、雄略天皇段の植物

雄略天皇段に登場する植物の数、種数、記載箇所などについて整理する。まず数だが、固有名詞に含まれるものを除いて11種類、21箇所である。[1] 他の天皇段と比べると多い。特に、歌謡にあらわれる植物数では最も多くなっている。種類は、カシ、クリ、コモ、タク、タケ、ツキ、ツバキ、ハチス、ハリ、ヒ（ヒノキ）、マキである。次の資料にまとめた。

〈雄略天皇段の植物〉　50音順

	植物名	数	記載	記載分類	歌い手	歌謡番号
1	カシ	3	波毘呂久麻加斯	歌謡	天皇	90
〃	〃		伊都加斯	歌謡	天皇	91
〃	〃		加斯	歌謡	天皇	91
2	クリ	1	久流須	歌謡	天皇	92
3	コモ	1	許母	歌謡	天皇	90
4	タク	1	斯濡多閉	歌謡	天皇	96
5	タケ	5	陀気（4箇所）	歌謡	天皇	90
〃			多気	歌謡	三重の婇	99
6	ツキ	3	百枝槻（2箇所）	本文		
〃			都紀賀延	歌謡	三重の婇	99
7	ツバキ	1	由都麻都婆岐	歌謡	大后	100
8	ハチス	2	波知須	歌謡	引田部赤猪子	94
〃			婆知須	歌謡	引田部赤猪子	94
9	ハリ	2	榛	本文		
〃			波理能紀	歌謡	天皇	97
10	ヒ（ヒノキ）	1	比	歌謡	三重の婇	99
11	マキ	1	麻紀	歌謡	三重の婇	99

このうちタケが5箇所と最も多いが、すべてが歌謡に登場する。本文にあらわれるのは、ツキとハリだけであり、このツキとハリが特に重要な役割を演じているのである。すなわちツキは天皇を賛美する手段として用いられ、ハリは天皇を助ける存在だからである。ツキとハリについての詳細は後に述べる。

植物の、歌謡に登場する多さが雄略天皇段の特徴である。歌謡は雄略段に14首あり、そのうち8首、18箇所に植物が詠み込まれている。つまりほとんどが歌謡にあらわれることになる。歌い手は天皇自身とされるものが多い。まずは植物がどのように詠われ、用いられているかを各々検討する。

1、カシ。カシが神聖な樹木であることは、すでに指摘されている。[2] この雄略段にあらわれるカシは、前後の文脈から平群、三輪という地に生えていることがわかる。この地が特別な場所、あるいは讃える場所であることがカシの存在からうかがえる。タケ、コモも含まれる90番歌と、カシを繰り返す91番歌がある。歌は2首とも天皇が女性に向けて詠ったものである。

90　日下部の　此方の山と　疊薦　平群の山の　此方此方の
　山の峡に　立ち栄ゆる　葉広熊白樫　本には　い茂み竹
　生ひ　末辺には　た繁竹生ひ　い隠みは寝ず
　た繁竹　確には率寝ず　後も隠み寝む　其の思ひ妻　あ
　はれ

91　御諸の　厳白樫が下　白樫が下　忌々しきかも　白樫原
　童女[3]

90番では、「立ち栄ゆる　葉広熊白樫」の句が、カシに対する認識をすべて言い表わしていよう。歌の主旨は天皇による木誉め、その木が生えている土地誉めである。天皇の目線は、連なる山々全体から峡谷へ、そしてひときわ目立つ巨大なカシの木に移ってゆく。そしてクローズアップして木の根元へとスライドしてゆき、タケをとらえる。自然を大きく、さらにじっくりと見つめる天皇の姿が浮かぶ。91番は、カシという植物名を繰り返すことで歌にリズム感を与えている。またカシを印象付け、その木々の生えている光景をありありと思い浮かべられるように、効果的に使用している。さらに比喩的に用い、このカシが神聖であることを際立たせてもいよう。

2、クリ。「久流須」と表記され、栗の生えている所という意味であろう。

92　引田の　若栗栖原　若くへに　率寝てましもの　老いに
　けるかも

ここは若い栗の生えている原であり、天皇が詠いかけている対象である女性、赤猪子の若い頃という言葉を導いている。ここ

でのクリは、「若」が冠するからこそ用いられているのであり、クリ自体は重要な意味を含んではいない。たとえばクリでなくとも、この歌を詠むことは可能であろう。[4] 91番と同じ時同じ場所で詠われているが、植物学的にもカシとクリは同じ地域に分布していることから、実際の光景としても矛盾はない。なお、クリは固有名詞に含まれる場合を除けば歌謡にしか登場していない。[5]

3、コモ。イネ科のマコモのことである。前述の90番歌に「畳薦」と詠われ、歌のように畳や筵に編まれる、実用的な植物である。次の「平群」にかかるとされ、山々が畳み重なるように連なるといったイメージを導く言葉となり、歌の調子を整える役目を果たしていよう。しかし、植物としてのコモは、ここでは重要視されてはいないようである。

4、タク。タヘのことで、繊維が白いことから「白栲」と詠まれたり、白を導く言葉としても用いられる。

96　・・猪鹿待つと　呉床に坐し　白栲の　袖着そなふ　手腓に・・

この場合も「白栲の」と、次の「袖」の枕詞となっている。タクは単独で用いられることがなく、『記』の中で他にも「栲綱」「栲衾」「栲縄」とあらわれる。これらのようにモノの素材としてあらわれ、植物そのものとして用いられることがない。[6]

5、タケ。天皇と三重の媛の歌にあらわれる。天皇は、前述の90番歌の中に4箇所詠み込んでいる。「い茂み竹」「た繁竹」を繰り返し、タケの繁茂のさまを表現しながら、枕詞としても用い、歌にリズムを与えている。しかし、回数は多いがタケそのものへの意識は薄いような印象を受ける。対して、後述する99番の三重の媛の歌では「竹の根の根足る宮」と表現しており、幾分存在をアピールしている。タケの根は広い範囲まで伸び、土を抱え込む力が非常に大きい。この歌では、宮の土台となる地面が立派で丈夫であることを表すために、タケの特性が使われている。そしてこのタケは、宮を讃える役割を担っているのである。

6、ツキ。この植物は、樹木そのものよりも、その木の下という場が重視されているようである。[7] この99番、三重の媛の歌で、ツキは世界を覆うような巨大な樹木として表現されている。仁徳天皇段の大樹伝説とも共通するモチーフを持ち、樹木信仰の観念が認められる。詠う契機そのものがツキであり、よって歌の主体もツキである。ツキについては、後に詳しく述べる。

7、ツバキ。常緑樹であり、呪力を持つ神木と考えられた樹木のひとつである。[8] しかし『記』での登場は意外に少なく、

他に仁徳天皇段で一箇所、皇后の歌にあらわれるのみである。だが神聖性を表す「ユツ」の言葉を冠され、聖なる樹木として意識されていたことに変わりはない。

100 倭の　此の高市に　小高る　市の高処　新嘗屋に　生ひ立てる　葉広　斎つ真椿　其が葉の　広り坐し　其の花の　照り坐す　高光る　日の御子に　豊御酒　献らせ事の　語り言も　是をば

この歌では、葉が広く花が照ると詠われ、ツバキそのものが聖なる存在として位置づけられている。そしてこの聖なるツバキの葉や花のような「日の御子」雄略と詠われる。ツバキは「照り」「高光る」神聖さ、高貴さといったイメージが天皇に重ねられているようである。「生ひ立てる」以下「照り坐す」まで、ほぼ同様の句が57番の石之日売命の歌にあり、それゆえ「定形的な天皇賛詞」[9]とされる。だが、そもそも〝植物のような〟と喩えられ、誉められるのはなぜか。それは、植物への長寿、偉大さ、美などを讃える感情、畏怖や敬意といった観念が、天皇に対するそれへとスライドしやすいからではないかと考える。[10] ここでは天皇がツバキに喩えられるが、単なる比喩だけではなく、天皇とツバキが同じように神聖であるというような、両者を一体視するような視点が認められるだろう。両者に近似的な関係性が無ければ、このような視点は生まれない。ツバキと天皇には、非常に近しい、親近的な関係があると思われる。

8、ハチス。この歌は、すでに老いた引田部赤猪子が詠っている。

94 日下江の　入江の蓮　花蓮　身の盛り人　羨しきろかも

ここは、身の盛り人、つまり若い盛りの人の比喩的表現でありながら、次の語句をつなげるための装置として用いられている。同時にその鮮やかな花の美しさを、歌を聞く人に対して強く印象づける効果を持つ。

9、ハリ。97番歌、最後に「榛の木の枝」と強く詠われている。ハリそのものについて天皇が詠っている歌である。天皇との関わりを考える上で重要な植物ではないかと推察していることもあり、後に詳しく述べる。

10、ヒ。現在でも建築用の材として優秀な樹木であるが、「檜の御門」と詠われているように、古代からも建築に用いられてきた。『紀』の一書では、素戔嗚尊が「檜可三以爲二瑞宮之材一」つまり「ヒノキは宮殿に使うのが良い」と述べている。また二十年に一度の遷宮を繰り返す伊勢神宮の正殿は、ヒノキの白木造りである。心の御柱も近来ではヒノキであるらしい。[11] ほか、法隆寺の五重塔の心柱は、五百九十四年に伐採されたヒ

ノキ材である。この歌ではマキと一体で用いられているが、御門の素材として詠まれているだけであり、存在感はさほど強くないようである。

11、マキ。「真木栄く」と、前述のヒノキにかかる枕詞とされる。『古事記事典』[12]によると「檜、杉、槇などすぐれた建材、薪木となる木の総称」であるらしい。『日本古典集成』[13]頭注によると、「檜・杉の異名」である。ここでは、樹種は不明だが、神木とされる樹の一種、ととらえておく。三重の婇の歌では、タケ、ヒ、マキが宮殿を形容するために用いられ、讃えるために詠み込まれている。いずれも樹高が数十メートルに達し、力強く、偉大さを表すに相応しい樹木である。

以上、11種の植物について歌を中心に見てきたが、枕詞や、次の語句を導くために用いられていることが多かった。その理由としては、植物の色、形態、音の響きなど、歌を形づくるためのさまざまな要因が考えられる。全体として、特に植物を主題としては詠っていないものが多かったのだが、天皇自身が詠んだとされる歌が多いことはやはり注目してよいだろう。その歌の数は5首で、11回植物の名を詠い上げていることになる。これは、各天皇の中で最も多い回数である。他の天皇段と比べて、章段全体にあらわれる回数も多い。回数だけでなく、植物への視線や比喩用法などから、雄略は、植物をよく観察していたとうかがわせる一面もある。また、ツバキの例からは、植物と喩えられるだけではなく、一体視される姿も詠い上げられている。これらのことから、『記』おいて最も植物と関わり深い天皇、あるいは植物を身近にとらえている天皇と推察できよう。

二、百枝槻

次に、歌謡だけではなく本文にあらわれる植物のひとつ、ツキについて検討する。先にも述べたが、この雄略天皇段にあらわれるツキには、大樹説話のモチーフ、そして樹木信仰の意識がうかがえる。

又、天皇、長谷の百枝槻の下に坐して、豊楽を為し時に、伊勢国の三重の婇、大御盞を差し挙げて献りき。爾くして、其の百枝槻の葉、落ちて大御盞に浮きき。其の婇、落葉の盞に浮けることを知らずして、猶大御酒を献りき。天皇、其の、盞に浮ける葉を看行して、其の婇を打ち伏せ、刀を以て其の頸に刺し充て、斬らむとせし時に、其の婇、天皇に白して曰はく、「吾が身を殺すこと莫れ。白すべき事有り」といひて、即ち歌ひて曰はく、

緱向の　日代の宮は　朝日の　日照る宮　夕日の　日光
る宮　竹の根の　根足る宮　木の根の　根延ふ宮　八百
土よし　い杵築きの宮　真木栄く　檜の御門　新嘗屋に
　生ひ立てる　百足る　槻が枝は　上つ枝は　天を覆へ
り　中つ枝は　東を覆へり　下枝は　鄙を覆へり　上つ
枝の　枝の末葉は　中つ枝に　落ち触らばへ　中つ枝の
　枝の末葉は　下つ枝に　落ち触らばへ　下枝の枝の末
葉は　在り衣の　三重の子が　捧がせる　瑞玉盞に　浮
きし脂　落ちなづさひ　水こをろこをろに　是しも　あ
やに畏し　高光る　日の御子　事の　語り言も　是をば

故、此の歌を献りしかば、其の罪を赦しき。

この後、皇后がツバキを取り入れた歌を詠う。さらにその後で天皇が詠い、この3首は「天語歌」であると説明される。この説話において、ツキの役割は非常に大きい。ツキはどのような植物であろうか。

ツキは現在、植物図鑑にはない名称である。『日本国語大辞典第2版』には「植物「けやき（欅）」の古名」とある。『時代別国語大辞典上代編』でも「けやき」であり、「けやきの一種つきけやきとか、はるにれとかをあてても考えられるが、古くケヤキの名が見えず、のちのケヤキをすべてツキといったとみるべきである」としている。確かに『記』『紀』そして『万葉集』にはケヤキの名が見えない。古辞書類でもケヤキは見えず、室町時代末期以降にツキとケヤキが混同されるようだ。[14] 現在においては、ツキはケヤキの古名であるというのが通説である。[15] 本論では慎重に「ケヤキの一種」と定義づけておくことにする。ほぼ見分けのつかない同種であるから、その形態はケヤキに準じよう。『原色牧野植物大図鑑』によれば、ケヤキは落葉高木で高さ三十メートル、径二メートルになる、巨大な樹木である。ツキもまたこのような樹木であろう。以上のように、ツキは落葉する大木であろうと推察できた。

先行研究において、このツキは聖樹、神木と指摘されることが多い。[16] また、それにとどまらず世界樹、宇宙樹とみなす意見もある。[17] さらに、聖なるツキの樹の下を、「聖なる空間」としているのは近藤健史である。[18] ツキ（と、その樹下）が、神聖と唱えられる根拠には、この「百枝槻」の説話が大きく影響している。今一度、説話を見てゆく。

物語の舞台は巨大なツキ木の下、神聖な宴の時である。媛は、大御盞に落ちてきたツキの葉に気づかない。差し出された大御酒に浮かぶ葉を見て、雄略は媛を斬ろうとする。媛はツキを讃え天皇を讃える歌を詠い、許される。つまり巨大なツキがなけ

れば、この物語は成立しないのである。歌は、壮大な宮を讃える言葉から始まる。宮を誉めることは、そこに住まう天皇を讃えることにつながってゆく。そして天を覆うほどの樹木を詠いあげることは、樹木への賛美であり、その土地への賛美であり、さらにその御世つまり、天皇への賛美につながってゆくことになる。やはり「天皇の治世を賛美する歌」であり、豊楽の宴の主役が雄略天皇となっているこの説話全体が、「雄略天皇の治世のめでたさが示される」[19]ものであるという指摘は、首肯してよいであろう。

この天皇賛美の手段として、ツキという植物が用いられているのである。巨大で枝が非常に繁茂するという実態は、雄略天皇自身のイメージ―偉大であり、各地に行幸するなど勢いのある―と重ねることができる。また、ツキという樹木自身が天皇を賛美している、という考え方もできよう。ツキは雄略に、豊楽の宴の場と、賛美の歌（の機会）と、霊力の宿る神酒[20]を与えているからである。ツキまでもが天皇に奉仕し、服従し、賛美しているという天皇による支配の構図ともとれる。しかし雄略は、前述したように植物をよく観察し、歌に取り込み、植物と馴染み深い関係を築いていると考えられる。雄略は、媒に対しては処罰しようとするが、原因となったツキに対しては何の行動もとらない。よって、ここはツキと雄略天皇のほどよい関係、と見ることはできまいか。雄略は多くの植物を詠い、親しむ。植物もまた雄略に親しむかのように、ここで葉を落とすのである。ツキに人格があるとすれば、葉を落とす行為は奉仕し従う態度というよりも、親近感からの協力的な態度とみることも可能である。次に述べる榛の木についても、このように考えられる。

三、榛の木

ハリは、本文と歌謡に登場する。

又、一時に、天皇、葛城之山の上に登り幸しき。爾くして、大き猪、出でき。即ち天皇の鳴鏑を以て其の猪を射し時に、其の猪、怒りて、うたき依り来たり。故、天皇、其のうたきを畏みて、榛の上に登り坐しき。爾くして、歌ひて曰はく、

やすみしし　我が大君の　遊ばしし　猪の　病み猪の
うたき畏み　我が逃げ登りし　在り丘の　榛の木の枝

葛城山で、雄略天皇はハリの木に登り、詠う。ハリは現在のハンノキというのが定説であり、これを否定するような要因は見

出せない。「ハリノキ」が転訛し「ハンノキ」となった。[21] ツキと同じく落葉樹である。『万葉集』からは染料となることが知られ、歌のほとんどが染色に関わる内容となっている。『記』にはそのような側面は見られず、その木、その枝として登場するのみである。また植物としてハリが登場するのは、この雄略天皇段だけである。

この説話も『新編全集』頭注によれば、「樹木もまた天皇に奉仕し、天皇を守るのである」。そしてこのような、天皇を守るハリに呪力を認めるのは内藤英人である。「榛の木に対する古代人の樹的信仰が窺われる」[22] という説には、ハリに関する記述が他の文献に具体的に見受けられないこともあり、ただちに賛同し難いが、枝に注目している点は見るべきものがあろう。ツキにおいても、繁茂する枝を壮大に詠いあげることは、その枝の神性を讃えることであった。このハリの歌謡では、ハリとその枝を讃え上げる言葉はないが、最後に「榛の木の枝」と締めくくることによって、歌そのものがハリのためにあることがわかる。天皇を救うその樹の「木讃めの歌」[23] という指摘もある。

この説話は一見、ハリに逃げ登る天皇の怯懦の姿にみえる。『紀』にも類似の説話があるが、そこでは天皇が猪を恐れずに踏み殺し、歌謡は舎人の歌となっている。こちらは剛健な天皇像であり、まったく異なる描かれ方である。『記』での逃げる姿は決して臆病なのではなく、天皇の選択の正しさを示すものととらえたり、[24] 木に登る行為は有資格者を示すものととらえたり、[25] 神を感得し交わる威勢を語ろうとする[26]など、さまざまな見解がある。いずれも「逃げ登」った雄略の態度を正当化する為の苦心の跡が見られなくもないが、これらの見解のうえに、これまで述べてきたような雄略天皇の植物との関わり、つまり親密な関係を付加してとらえてみたい。天皇が窮地に陥り、常から親しんでいる植物の一種であるハリに抵抗なく近寄り、触れ、登る。そして救われた天皇がハリに感謝し讃える歌を詠む。

このような、植物によって救われる物語は、すでに神代部分にあらわれている。すなわち伊邪那岐命が黄泉の国から逃げ帰る場面である。カズラから生えたヤマブドウ、櫛の歯から生えたタケノコ、さらに傍に生えていたモモの実。これらによって難を逃れるのである。さらにモモには、讃える歌ではないが名を与えている。植物の持つ力を信じ、感謝し、親しむ心の存在を想起させる。植物と、植物によって助けられる者との間には「支配」や「奉仕」といった面よりも、むしろ「親近感」や「協力」、という関係性が浮かび上がる。

この他、大穴牟遅の知恵により、ガマノホで体を治療する兎神の説話や、その大穴牟遅が木の俣からくぐり抜けて八十神による迫害から逃れる場面など、植物によって救われたり、難を逃れたりする話は所々に見ることができる。

ここで気付くのは、植物に救われる者は、物語の主人公（王たる者）あるいはその協力的存在である、ということだろう。たとえば仲哀天皇段の香坂王は、クヌギに登っていながら大きな猪に掘り倒され、食い殺された。香坂王は反逆者である。植物が、王でない者を認めずそれゆえ救わない、と読むことができる。

この雄略天皇の説話は「天皇が榛の木の上に逃げ、救われるのも「有徳」の結果とする思想」[27]の表れかもしれないが、「徳」よりも「親和」といった心を持つがゆえの結果であり、さらに王者であるから、といえるのではないだろうか。

四、雄略天皇像と自然

雄略天皇像について、『記』の植物を手がかりとし、検討してきた。まず、雄略天皇段の植物をすべて調べた結果、雄略が他の天皇に比べ、植物を最も多く歌謡に詠み込んでいることがわかった。また、自然への視線や、雄略とツバキとの一体視などからも『記』おいて最も植物と関わり深い天皇、植物を身近にとらえている天皇であると考えられた。

さらに、本文部分に説話としてもとりあげられているツキ、ハリを詳細に検討した。これら二つを、従来の解釈方法のように「ツキの説話」「ハリの説話」として分けるのではなく、「天皇と植物とが関わる説話」としてとらえてみると、天皇の賛美や治世のめでたさなどを物語っているだけではないことが見えてきた。それは天皇と植物の関係である。従来の、天皇による支配、植物によるによる奉仕といった関係ではなく、天皇と植物の協力関係、親和関係である。これは、雄略天皇の「大悪」や残虐という〝怒る天皇〟というイメージ、また「有徳」とも異なる新たな一面である。雄略天皇段には『記』『紀』を通して、例えば大国主命の国造りや『紀』に見える仁徳天皇の治水工事のような記事がない。つまり、自然の開発に関するような記載がないが、これは偶然であろうか。自然を従わせるのではなく、自然との調和をはかるという人物像が浮かび上がる。

『万葉集』冒頭の歌は、雄略天皇が丘で菜を摘む児に詠いかけるものである。植物を主体とする自然の中に立つ天皇の姿がイメージできよう。この姿が、今回植物を手がかりとして見出

した雄略天皇の姿にもっとも近いといえる。植物と天皇、あるいは自然と王者といった関係に踏み込み、新たな天皇像そして『記』解釈の可能性を探ることを今後も課題としたい。

注

1　応神天皇段14種21箇所（歌謡12箇所）、雄略天皇段11種21箇所（歌謡18箇所）、仁徳天皇段10種20箇所（歌謡11箇所）、景行天皇段14種18箇所（歌謡10箇所）

2　川副武胤『古事記の研究』（至文堂一九六七年十二月）、尾畑喜一郎編『古事記事典』（桜楓社　一九八八年九月）、居駒永幸「樹木崇拝と古代歌謡」（『日本歌謡研究』35　一九九五年十二月）など

3　『記』引用は、『新編日本古典文学全集』小学館による。『紀』『万葉集』も同様。歌の番号も同様

4　植物と若さを重ねる用例としては、『万葉集』三八七四番歌がある。

射ゆ鹿を　認ぐ川辺の　にこ草の　身の若かへに　さ寝し児らはも

クリと若さが関連する歌は確認できない。

5　考昭天皇段「羽栗臣」、清寧天皇段「甕栗宮」、用明天皇段「植栗王」。歌謡は応神天皇段の42番、43番歌。ともに「三つ栗の」と詠われる。栗はイガの中に三個入っている場合が多いのでこの言葉となったのであろう。「中」の枕詞。

6　『万葉集』でも白栲、荒栲、栲縄、布栲、栲角といった表現がほとんどである。七九番歌に「栲乃穂」が見えるが、珍しい用例と考えられる。

7　『紀』には、ツキの木の下でのさまざまな行為が記されている。

皇極三年「偶に中大兄の法興寺の槻樹の下に打毬の侶に預りて…」

大化元年「天皇・皇祖母尊・皇太子、大槻樹の下に群臣を召集めて…」

天武元年「飛鳥寺の西の槻の下に拠りて誓を為る」

同六年　「多禰島人等に飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ」

持統二年「蝦夷の男女二百一十三人に飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ」

同九年　「隼人の相撲を西の槻の下に観す」など

8　『紀』景行天皇段にツバキの槌で土蜘蛛を討伐した話、天武天皇段に吉野の人が白いツバキを献上したという瑞祥譚などが見える。

9　山路平四郎『記紀歌謡評釈』（東京堂出版　一九七三）

10　土橋寛『古代歌謡全注釈　古事記編』（角川書店　一九七二）は57番歌「其が葉の広り坐すは大君ろかも」が掛詞によって「比喩的関係ではなく、融即的関係」にあるとする。「融即は生命的連繋の関係」とするが、連繋するためには植物と天皇の間にそれだけの

近しい関係性が存在しなければならないだろう。

11　足田輝一『樹の文化誌』朝日選書292（朝日新聞社　一九八五年十一月）は、伊勢神宮の社殿について「カシという樹の、樹種は明らかでないが、照葉樹林の構成要素である、常緑のカシ類が、いつのこうか針葉樹のヒノキの柱と変っていったのであろう。―略―「心の御柱」の原型は、サカキであったともいえる」と述べている。

12　注2尾畑前掲書

13　西宮一民校注『古事記』新潮日本古典集成（新潮社　一九七九年）

14　『新撰字鏡』では「槻　豆支又加太久弥」。『和名類聚抄』では「槻　唐韻云槻音規和名豆木乃木木名堪レ作レ弓也」。『本草和名』には項目や字が見当たらない。『類聚名義抄』（観智院本）では「槻」で「ツキノキ」と記され、「けやき」にあたる漢字は見当たらない。『色葉字類抄』（黒川本）は「槻」で「ツキノキ」で、「けやき」にあたる漢字はない。かなり時代は下るが『大和本草』では「葉モ木理モケヤキニ似タリ、葉ヲ見テハ別チガタシ、只其木理ヲ見テワカツ、一類別物ナリ、葉ハブナノ木ニモ似タリ」。ケヤキは「槻ト一類ナリ」。同類であるが同じとはなっていない。白井光太郎『樹木和名考』によると、ケヤキの名称の初出は『饅頭屋本節用集』らしい。『饅頭屋本節用集』では『樫』の字に「ケヤキ」と振られている。『書言字考節用集』では「槻」に「ケヤキ」となっている。ただし「ツキノキ」とも振られている。（『大和本草』の記述は『古事類苑』植物部による）

15　注10土橋前掲書、『新編全集』頭注、松田修『増訂萬葉植物新考』、山田卓三・中嶋信太郎『万葉植物事典』（北隆館　一九九五年十一月）、足田輝一『樹の文化誌』も同様。『古事記事典』は「ケヤキの一種。ツキゲヤキ。ケヤキの古名でもあるのでどちらかはわからない」とする。

16　注10土橋前掲書、平田嘉信・身崎壽『和歌植物表現辞典』（東京堂出版　一九九四年七月）、尾崎錫殃「槻の落葉」（『國學院雑誌』第九十六巻　一九九五年十二月）など

17　中西進『世界樹』（『上代文學の諸相』塙書房　一九九三年十二月）、勝俣隆「大樹伝説に見られる宇宙樹的要素と生命の水―雄略記百枝槻の条を中心として―」（『静大国文』第二十九号　一九八四年二月）など

18　近藤健史「樹下の宴―「活道の岡」と「庄の門」の宴歌―」（『美夫君志』第四十四號　一九九二年三月）。近藤は他に樹下の場を論じたものとして呉哲男「ちかひ」（『古代語誌　古代語を読む Ⅱ』桜楓社　一九八九年十一月）、赤坂憲雄「古代の交通―チマタをめぐる幾つかの考察―」（『境界の発生』砂子屋書房一九八九年四月）をあげている。

19 『新編全集』頭注による。

20 注10土橋前掲書「槻の葉の霊力（マナ）が接触によって上・中・下へと次第に蓄積されていき、下の枝の葉は最もマナに富んだ呪物になる」「マナを最も多量に含んだ下の枝の葉が、酒杯の酒に浸りなじんで、葉のマナが酒に移される」とする。近藤、長野も同様の見解を示す。

21 『万葉植物事典』『原色牧野植物大図鑑』などによる。「榛」の漢字は本来ハリではなくハシバミをさす。『本草和名』『倭名類聚抄』などによる。『饅頭屋本節用集』『書言字考節用集』などによると、ハリノキを示す漢字は「榿」である。しかしこの『記』の説話の本文と歌謡の対比から、ここは「榛」を「波理能紀」と訓むことは明らかであろう。

22 内藤英人「榛の木の周辺―記紀重出歌をめぐって―」（『文学研究』第七十九号　一九九四年六月）「大木であることもさることながら、堂々とした幾つもの枝を持つものが多く、神を呼び寄せるためには、単に樹木であることに留まらず、堂々とした枝ぶりが重要であったと思われる。つまり、歌謡に「枝」が詠み込まれているのも、枝の中に宿る神性にあり、この歌謡も強い霊力を持つ神の存在を「枝」を通じて顕示したもの」

23 注10土橋前掲書、『古事記事典』などによる。

24 榎本福寿「『古事記』雄略天皇条の所伝のなりたち―二話一連の構成について―」（『古事記年報』四十一　一九九九年一月）

25 注22内藤前掲書

26 都倉義孝「仁徳と雄略そして顕宗・仁賢の物語―『古事記』下巻の構造をめぐって―」（『国語と国文学』一九九三年十二月）

27 注13頭注による。